医学引用文献のことなど

■■■■■■ 特集・第8回講習 ■■■■■■

(I) リポート

杉 本 宗 明*

文献の引用で
望みたいこと

元来日本人は、とかく文献を軽視する傾向があるらしい。医学研究者の間でさえ、いかに粗末に扱われていることだろう。

数年医学雑誌の編集補助の仕事に携わっていて、そのいい加減さに驚いたことであった。投稿される論文のうち、書誌的データがすべて正確だったというものは、ほんの数えるぐらいしかお目にかからなかったといってよい。不正確なデータである上に、邦文の論文はいかにも参照が多すぎる。10頁あまりの原著に100を越える参照というのがめずらしくない。なるほど、研究を始めるに当っては、古今東西にわたってできるだけ多くの参考文献を集めるのは当然である。英仏独などの国際的な国語で書かれ権威ある専門誌にのった論文を知らなかったなどというのは、業績の価値にも影響しよう。

しかし孫引きの参照を、あたかも自分でそれを読んだかのように臆面もなく並べたてるといのはどうだろう。はなはだ失礼な見方かもしれないが、貧弱な内容をそれによって少しでも権威づけようという気持ではないだろうか。われわれは、これを「ばばあの厚化粧」と称して肩をすくめている。日本にないような文献をのせておいて、他日読者からその文献を読みたいから知らせてくれといわれ恥をかくこともあるという。

まあ著述者の良心や人格の問題などは別と

して、困るのはその書誌的データの誤りである。まえの人の書誌的データが間違っておれば、そっくりそのまま誤りのデータをのせることになる。中には、ついでに自分のケアレ・ミスまで付け加えるといった念入りなものまである。

すぐれた著作でも、不正確な書誌のために台なしにされることがある。著述者はもっと参照を大切にしなければならない。投稿する前にはぜひ参考文献を全部、書誌資料で確認するようにすべきである。

Place (1916) は参考文献の検証について、次のように言っているそうである。

「一般に誤りは、参照を他の人の書誌からあたかもそれが福音書の真理であるかのように受け継ぐことから起る。いかなる参照も確認済みのものと思ってはならない。最良の友人が与えてくれた参照でも確めよ。尊敬する上長の与えてくれた参照すら確めよ。なканずく自分自身が見出して、ざっと書き留めた参照は必ず確めよ。人間には誤りがある。確めることこそ必要なのだ。」

不正確な参照のために多くの研究者や図書館員に迷惑をかけるべきではあるまい。雑誌の編集に携わるものは、書誌的事項の記載にはもっともっと厳格な態度でのぞみ、不十分なものは全部削るぐらいの心構えでやってもいい。

優秀な館員や教授による、学生とくに大学院の学生に対する文献学の講義は、ぜひ必要だと思う。

* Muneaki SUGIMOTO, 鳥取大学医学部図書館

相互貸借を利用する 前に行なうべきこと

二年前当館でもマイクロフィルム撮影機を入れてから、年々相互貸借の申込みはふえて、今年は現在受付番号が500番台に入るのはどの増加ぶりである。それだけ研究が盛んになったものと、われわれ図書館員は喜ぶべきものかもしれない。しかし、ここで考えてみなくてはならないのは、われわれがこの便利なシステムをあまりにも安易な気持ちで利用し過ぎてはいないかということである。

37年度に当館へ申込みのきた複写申込書600余枚をめくってみると、その中、規定された書誌のデータを完備したものは3分の1にも満たないのである。

たしかに、誌名、巻次(または年号)、それに頁(または著者)さえ記してあれば、仕事はできないことはないが、中にはいろいろまぎらわしい問題を含んだ雑誌も少なくない。それに人間には誤りがある。とくに巻次、年号のミスは救われないが、これら数字のミスがまた大変多い。近くない保管先の教室に何度も足を運んで、やっと借りてきた図書に該当の文献のないときほど情ないことはない。ひどいものになると、著者と年号しかないものもあり、われわれは書誌資料と首つ引きで判じ物を解かされる始末である。これでは「相互貸借は義務じゃあないんだ。あくまで好意にすぎないんだぞ」とどなりたくもなる。申込みの前に書誌資料で確認するぐらいは、借受側のエチケットであろう。データの不備から、どうしても該当文献が見当らず「ご調査の上再申込みを請う」などということになれば、もっとも困るのは利用者で、その貴重な時間的ロスは取り返せないのである。

当館のような蔵書の少ない小図書館では、自然相互貸借の利用も多くなる。普通、出納台に差し出された請求図書で学内に無い図書

であれば、われわれは気軽に申込用紙を差し出してこの特典の利用をすすめ、利用者の持ち合わせている書誌のデータを記入してもらって、貸出しの寸暇をみつけて照合の上、申込むのであるが、利用者とその場で書誌資料を参照することがぜひ必要だと思う。

利用者は、その文献が自分にとって、どの程度の重要性をもつものであるかということにわかっている人は案外少ない。論文の長さ(頁数)や正確な論題をメモしている人がいかに少ないことか。もしそれが学会やシンポジウムなどの半ページにも満たない抄録なら必要ない人もいるだろう。また所蔵の抄録資料で抄録を読めば、それでこと足りることもありうる(実際、外国抄録誌がほとんど利用されていない)。折角届いたコピーを見て、「なあんだ、この程度のことか」などと利用者のもらすのを何度も耳にしたことがある。係員は利用者にあらゆる書誌的資料を指示して使わせ、利用者自身によくその重要度を評価させた上、借受の必要なものなら申し込むようにする。

各館でこの程度のことを行なえば、少なくとも2割は件数がへり、利用者の無駄な金銭的負担を節約できるばかりか、貸出、借受両館でそのために費やされる貴重な労力の節減に役立つと思うのである。

☆ ☆ ☆

第8回講習

レポート題名一覧

— 次号に掲載の予定 —

(編集部)